校長室だより～燦燦～ №３３３

自分を育てる

2021.3.26

人は皆、自分の人生のリーダーとして生きていかなければならない。古来、リーダーたる者には必須の条件があるそうである。それが「修身」である。修身とは、身を正しく修めて、立派な行いをするように努めることである。気まぐれ、わがまま、むらっ気を取り去り、自分という人間を少しでも立派に磨いていく。これが修身である。

修身の度合いを心理学的に考察した方がいる。その方によると、心は発達するものであり、七つの段階があるという。

第一は自己中心の心。赤ちゃんがそれである。自分の欲求だけで生きている。

第二は自立準備性の心。幼稚園児の頃である。用事を手伝ったりする。

第三は自立心の段階。成人を迎え自立する。

第四は開発力の時代。困難に立ち向かい、開発改善していく力を持つ。年齢的には３０～４０代になろうか。

第五は指導力。４０～５０代になり部下を指導していく。

第六は包容力。好き嫌いを超えて人を包容していく。

そして第七は感化力。その人がいることで自ずと感化を与える。最高の状態と言える。人間、晩年にはかくありたい。

留意したいのは、人は歳月とともに身体的年齢は増えるが、心の発達は必ずしも歳月に比例しないという点である。前述の方によると、年は取っても７５％の人が第二段階の状態で終わり、第三段階までいくのは１５％、第四段階に至るのは１０％だという。修身の厳しさを思わずにはいられない。

また、ある方によると、自分を育てるための三つのアプローチがあるという。

まずは笑顔、次に「ハイ」と肯定的な返事ができること、そして、人の話を頷きながら聞くこと、最低限この三つができているかどうかで人生が大きく違ってくるという。

例えば、仕事の場面でいうと、自分がまだやったことのない仕事を頼まれたとき、あるいは違う部署に配属になったとき、「それは私にはできません」とか「自信がありません」と言ってしまうことがあるかもしれない。

しかし、私たちは新入社員の頃は、ほとんどすべてが初めての経験で、自分がやれるかどうかなど分からないのに、素直に「ハイ」と言っていたはずである。そうして仕事を受け入れてきたからこそ、自分の能力をひらくことができたのではなかろうか。

だから、仕事を頼まれたときは笑顔で「ハイ」と受け入れてやってみる。教えてくれる人の話を頷きながら聞く。それが自分を育てていく道である。「できません」「やれません」と言ったら、すべての可能性の扉が閉まってしまうことになる。

人生には不変の原理が二つある。一つは、人生は投じたものしか返ってこないということである。人生に何を投じたか。その質と量が人生を決定する。もう一つは、人生は何をキャッチするか。同じ話を聞き、同じ体験をしても、そこからキャッチするものは人により千差万別である。キャッチするものの中身が人生を決める。教育もまた、この二つの原理が相まって成就する。

イギリスの１８世紀の歴史家ギボンの言葉がある。「あらゆる人は二つの教育を持っている。その一つは他人から受ける教育であり、他の一つは、これよりももっと大切なもので、自らが自らに与える教育である」自らが自らに教育を与える、一人の人間をしてそういう意識にまで高めることこそ、人を育てる神髄ではないか。

自立心、開発力、指導力、包容力、感化力、自分がどの段階にいるのかは分からないが、まだまだ道は険しく遠いのは確かである。縁あって梁川高校に勤務するようになり、この「校長室だより～燦燦～」を出すようになって１年と４ヶ月ほどになる。本日が№３３３となった。「燦燦」なのだから「３３３」で区切りのがよい。ここで一旦、小休止にしようと思う。

４月からは、福島市立野田中学校の Web ページより発信することになる。小学校に行ったかと思ったら高等学校に来た。そして今度は中学校である。残すは幼稚園ということか。今までお読みいただいてきた皆様に感謝申し上げ、梁川の地を去ることとしたい。ありがとうございました。